

仮定法としての『源氏物語』

新・文化論の構想に向けて

ハルオ・シラネ

コーディネーター…小林正明

*本報告は、コロンビア大学東アジア言語文化学部大学院・秋学期（二〇〇一年九月／ニューヨーク市マンハッタン）のシラネ・ゼミを再編成したものである。
編集・訳文は、ハルオ・シラネと小林正明が共同担当した。

させた、やや大掛かりな文化論なのですが。ともあれ、文化論という領域には、かなり期待できるのではないかと、と予感しています。文学という既存概念を避けて、文化の現象として見る、という構えが基調です。

文化の概念と言っても、さまざまでしょうが、手始めに、デュルケムの文化論に溯って確認しておきたい。デュルケムによれば、文化とは象徴的なシステムである。社会の成員が、共同体において、相互にコミュニケーションする、意味の定型。これが文化である。文学を含めた文化的な現象も、価値観や信念の体系にかかわる、共同的な表象である。こうした共同の表象は、世代間の伝承を経由して、社会に累積されていく。

デュルケムのばあい、文化の単一観を強化し維持しよう、という傾向がまさった文化論であると言わなければならぬ。デュルケムに限らず、永続性・支配性・伝統などなど、何らかの単一観を志向する文化論の流れが確かにある。

だが、近年の新しい文化論は、単一的な文化論に異議を唱えるようになってきた。つまり、社会とは、単一性のものでなく、複数性のものである。社会の中に、差異があり、矛盾が孕まれている。社会にせよ文化にせよ、永遠に不変なものでなく、絶えず変容してきているものである。そのように分裂し、変容する、社会の中で、文化はどのような役割を果たしうるのか。——そのような

I 理論篇——新・文化論の仮定法

1 文化論の予感

小林 ハルオ・シラネは、角川源義實に輝く『夢の浮橋——「源氏物語」の詩学』（中央公論社、一九九二年）や、「俳諧的想像力」を世界の詩学の文脈の中で解明した近著『芭蕉の風景 文化の記憶』（角川書店、二〇〇一年）、またカノン形成の問題をすべく提起した編著『創造された古典——カノン形成・国民国家・日本文学』（新曜社、共編・鈴木登美、一九九九年）によって、日本の読書層を挑発しつづけてきた研究者です。これらの論著を繙くたびに、よくこのように広範な対象を、問題点の系列として鮮明に定位できるものだな、と圧縮の強度に驚嘆せざるをえません。

そのハルオ・シラネというかシラネ教授が、最新の現在、どのような問題意識をもっているのか。そして、その問題意識の現在が、いままでの一連の仕事と、どのような連続性になっているのか。そのあたりのところから、お伺いいたしたく、よろしく。

シラネ 現在、文化論を、構想中です。グラムシ、アルチユセル、フーコーなどの「権力・言説」論などと連環問題の立て方だから、単一性に傾斜する文化論と、違っているわけですね。

2 「仮定法」の文化論——ターナー、ギアーツ

シラネ 要するに、文化と社会システムとの関係とはそもそも何か。そこが大きな問題です。そうした問題意識に引き付けて見渡したばあい、アメリカの文化人類学者であるヴィクター・ターナーが焦点化した、「仮定法」としての文化という着想。もともと、ファン・ジエネツプによる通過儀礼の三段階論に由来するものですが。ともあれ、これが、かなり有効な方法概念になるのではないかと見込んでいます。

文化の役割とは何か。社会が葛藤や矛盾を孕むものだとするならば、文化たるや、そうした葛藤や矛盾を解決する安定装置として、あるいはそれらの対立を反映する表現として、位置付けることができる。祭事にせよ通過儀礼にせよ、主体はいったん日常の時空から、境界的な時空に、脱出する。その境界的な領域において、「仮定法」的な発想が作動するわけです。結局は、日常性に戻ってくるわけだけだ。

小林 戻ってきてしまうなら、ターナーのばあい、やや社会観が循環的に固定している、そんな感じでは。歴史が展開するダイナミズムを捨象しているような。

シラネ そう。その循環的な社会観の固定性が、欠点といえば欠点です。だが、戻ってくる局面よりも、とりあえず、脱出すること、まさにその局面に注目したい。ターナーの中から、可能性の中心を拾い出すわけです。儀礼の実修にともない、日常の構造から脱出して、構造の「間」とでもいふべき境界的な時空に移行する。この過渡的な「間」ないし境界的な周縁こそが、仮定法の時空に他ならない。

もう一人無視できない研究者として、クリフォード・ギアーツがいます。ギアーツは、仮定法の延長ともいえるのですが、こんなふうな文化を定式化しています。すなわち、文化的な現象というものは、社会が認める実験、社会が許す実験である、と。もし、文化という実験がなければどうなるか。社会は絶えず問題を抱えて動いている。だが、そのような流動的な現実の状況の中で、社会の成員がやりたいことをやればどうなるか。帰結として発生するものは、混沌であり、戦争でしよ。したがって、文化というものは、そのような流動性の中で方向付けや解決を模索するうえで、繰り返し可能なテスト実験である。さらに、その累積的な実験が、社会そのものを変革しうる効果をもつ、と。実験が、実践に、繋がっていく。それが、ギアーツです。

ターナーのばあいも、産業革命に節目を見取りつつ、仮定法の実践力を秤量しています。産業革命の以前に

うなら、シェークスピア研究において、ニュー・ヒストリシズムは画期的な成果と方法意識の変革をもたらしました。ニュー・ヒストリシズムによれば、既存のシェークスピア研究は、次の二点に、難点がある。すなわち、第一は、シェークスピアのテキストが、一六世紀・一七世紀の固定した社会および社会観を採り入れている、との考え方である。この根柢には、テキストが世界を反映する、との発想があった。第二は、テキストを独立したものとしてみる、形式主義的な文学観である。ニュー・クリティシズムにしても、構造主義にしても、テキストの独立性・統一性という考え方は、温存されたままであった。以上の二つの流れに反発したのが、この学派に他ならない。

なぜ、この学派は反発したのか。裏返せば、ニュー・ヒストリシズムの要目とは何か。第一に、テキストは単なる現実の反映論的な所産に留まるものでない。テキストは、現実の構造に参加している。テキストは、現実が抱え込む力関係を主体的に取り込んでいる、という点で生産的である。第二に、テキストは、狭義の文学テキストに留まるものでない、との見方である。ニュー・ヒストリシズムはテキストとノン・テキストの境界を果敢に突き崩した。ノン・テキストを広義のテキストに繰り込んだ、とも言えるだろう。既存の文学テキスト研究は、テキストとテキストの相互連関的な探求に留まるき

は、悲劇とか儀式とかが、同時代の社会構造を強化してきた。支配層の力を上から強化した。むろん、そういう文化の中にも仮定法は入っていた、ただし、その比率や効用が薄かった、とも付言している。

産業革命以降、仮定法の力が有効に発揮していく。そういうパースペクティブです。すなわち、産業革命以降、生産原理がまさる近代社会のなかで、映画とか演劇とか小説とかそういう文化的な現象は、役に立たない、非生産的なものである、と見られている。アウトサイダーさながらに。だからこそ、逆説的な理路になります。非常に有効である。なぜかという、そこに仮定法が発動しているからです。仮定法の発想は、次のようなものでしたね。現実Aであるけれど、だがしかし、そのような現実Aに反して、「もし」Bの条件の下なら、どうなるか。Cなら、どうなるか。Dなら、どうなるか。Eなら、どうなるか。つまり、非生産的と見なされた文化的な現象は、現実の社会と異なる、さまざまな撰択肢(オプション)を開拓しているわけです。

3 ニュー・ヒストリシズムの実践と可能性

シラネ さらに、仮定法という文化論や実験としての文化論を、より具体的な文脈で展開したスクールとして、ニュー・ヒストリシズムは、見逃せません。文学領域でい

らいがあった。通時的な方法意識です。いわば本歌取りに留まるものであり、系譜的な研究に過ぎない、と言えるだろう。既存の研究通念に立脚した文学史とは、要するに、家系図のアナロジーに過ぎない。一方、この新学派は、共時的な方法意識が強い。例えば、地図と庭と家具と手紙とシェークスピアのテキストとが、一繋がりに横断的に連鎖していく。さらに第三の問題意識として、歴史を作ることが文化の大きな役割であること、これを強調している。この発想は、ニュー・ヒストリシズムだけの専売であるわけではないが、とにかく歴史への参加意識が、この学派に顕著である。文化の役割は、価値観を創造し、次世代に伝承することにある。その価値観の創造に際して、過去の解説が重要な過程として位置付けられる。歴史といっても、一義的に固定した過去があるわけではなく、それを記述する主体の現在に立脚して、再生産されるものである。このような自覚の下で、歴史のテキスト性/テキスト性としての歴史、という問題が大きく浮上することになります。以上の三点が、仮定法との連関で把握した限りでの、ニュー・ヒストリシズムの眼目である、といえます。

問題意識の骨子は、あらあらとでしたが、だいたい以上のようなところでは、

いかがでしょうか。

小林 理論篇として、たいへん鮮明な輪郭を提示していた

だきました。
それでは、いよいよ実践篇ということで、いかががでしょうか。既存の日本文学研究がともすれば疎外してきた

盲点領域を、斬新な知見によって、具体的に、どう解析するか。とくに「仮定法」という着想の切れ味。そのあたりに期待しながら、実践篇を謹聴いたしたく。

II 実践篇

仮定法としての『源氏物語』

ハルオ・シラネ

1 遠心化作用がもたらしたもの

文化現象を考察するばあい、権力の中枢からの距離を測定することが鉄則の一つです。

平安時代のケースも例外ではありません。平安時代の文化は、まあ時期として一〇・一一世紀あたりを念頭においてのことですが、そうした権力との距離という尺度において、古代の文化とは相当に違っています。平安のばあい、ズレをよぶ遠心作用がより強度です。

まず、政治の次元でのズレ。政治権力の中心は、天皇から摂政・関白へと、玉座そのものから臣下の一族（主として源氏ならびに藤原氏）へと移行し、新たな中心勢力は自己目的のために玉座を利用した。奈良末期まで、天皇は、親政し、太政官を媒介として行政に携わったが、平安初期の桓武天皇の統治下にいたり一転して、内裏と太政官との

間に、天皇と官僚制との間に、分離が産み出された。また、新興勢力は、地方の国司に進出し、任国の收奪を事として、太政官の支配が及ばない階層となりつつあった。

次に、文学の次元でのズレ。物語がその好例です。平安時代に勃興した文学といえば物語です。その書き手じたい、地方の国司階級に属するが、階層としては堂上貴族よりも一ランク下位に属していたわけです。また、ジャンルで言うなら、物語のばあいは、はるかに私的領域に帰属している。古代のばあい、人麻呂長歌を典型とするところの宮廷韻文があり、これは共同体を強度に表象していたし、また記紀から六国史へと至る史書は正史であったわけですから。なるほど、平安物語は、貴族や天皇を扱う、その限りでは奈良時代の貴族的な宮廷文化を引き継いでいる。だが、『古事記』『日本書紀』、あるいは『万葉集』最初の数巻は、どうであったか。これらは天皇やその代理人の権威・権

力・聖性を荘厳化しつつ強化した。それらとは対比的に、物語の主役たちは、玉座を侵犯し、相対化している。これら物語の主役は、その出自として、非藤原氏であるか、没落した王族であった。『伊勢物語』は、支配クランである藤原北家を肯定するどころか、藤原氏によって打ち負かされ、その繁栄の陰で没落したものに立ち対する、すなわち業平の家系である在原氏に対する、深い共感・同情を顕している。

てですね。『源氏物語』は、この一点の突破によって、天皇制の言説を致命的に掘り崩しているからです。

権力の中心から、若干だけ乖離すること。そのわずかなズレの帰結として、物語はより多くの撰択的な声を提供することになります。理論篇で焦点化した仮定法の効果が、そのズレに比例して、増幅するわけです。物語の機能は、社会的・政治的な階層体制を強化するだけでなく、可能態としての撰択肢を提示しています。『源氏物語』のばあい、おいおい検証するように、仮定法がとくに強烈です。『源氏物語』は、天皇が藤原氏の閥閥に操られる傀儡に過ぎなくなった時代にできた物語ですが、そうした同時代の状況と逆立して、ことに第一部において、天皇が直接的な権力を執行した先行の時代まで溯行することによって、天皇制の言説を喚起し、実際に理想化しています。だが、王権を聖化する研究言説のように、その理想化作用だけを過剰に強調することは、誤謬に陥りかねません。なぜなら、反面で、『源氏物語』は、皇統譜の聖性が侵犯される可能性を方法的に露呈している。物語という、仮定法の位相におい

なるほど、権力中枢からのズレは、社会全体の大局的な階層を尺度とすれば、ささやかな乖離に過ぎない。だが、このわずかな遠心的乖離こそが、その脱領域的な強度によって、撰択言説であれ天皇言説であれ、中枢権力に深手を負わせているのです。

2 反映論の転倒を求めて

ニュー・ヒストリシズムの知見によれば、文化の主要な機能は、過去を生産し再生産することであった。これを銘記するなら、反映論的なミメシス観を転倒すべき要請は、瞭然としている。その限りにおいて、『源氏物語』も例外ではなかった。

なるほど、『源氏物語』は、ある種の「過去」を生産し、またその「過去」を体現するものとなった。『源氏物語』のばあい、それを取り巻く言説が、テクスト自体と同様に、重要となった。実際、『源氏物語』は、平安貴族文化と宮廷文化のもつとも精妙かつ豊饒な実例として、平安貴族文化の絶頂を表徴する精華である、とされるようになった。しかしながら、『源氏物語』は、紫式部と同時代の生活を反映するものでありえない。

ら、慶滋保胤（二〇〇二年没）の『池亭記』や藤原明衡（八九一〇六六年）の『新猿楽記』を繙くとよい。『池亭記』は、平安京が、荒廃に晒され、左京／右京の均衡を損ない、不安と暴力と死に満たされた都市であること、これを詳らかにしている。この映像は、『源氏物語』や近代の概説書に見られる、典雅で均整のとれたいわゆる「京」のそれとは、ほど遠い。同様に『新猿楽記』もまた、『源氏物語』の世界とは異なる、民衆文化と変化に富んだ社会生活があることを明らかにしている。すこし後代の成立になるが、『今昔物語集』は、中流クラスの貴族に関してまったく異質な姿を提示している。そこでの男性貴族たちは、高欄にくつろぎ、詩歌をたしなみ、管弦に興じ、なかなか女君を誘う、そういった物語の男君と一線を画している。それどころか、彼らは、蓄財と土地の獲得に勤しみ、時には盗賊や同輩と相挑み、そうした自己の目的を貫徹するために、ありとあらゆる手段を駆使する実利の人である。換言するならば、紫式部が『源氏物語』で生み出した世界は、貴族社会の絶頂にいた一一世紀初期の人々にとつてすら、同時代の生活実態とは懸け離れている。

『源氏物語』第一部は、天皇親政の時代とされた醍醐天皇の治世（八九七―九三〇年）を反響させる形で、過去に溯源している。つまり、この物語は、一一世紀初期から眺めた文化的理想を生産しようとした、試行の所産であり営為である。『源氏物語』は、一一世紀初期の当時に実在し

なかった文化的理想、かつまた、未来においても決して実現しなかった文化的理想、これを創造したのである。

だが、この仮定法は、後代において、ある種の転倒を引き起こすこととなった。それほどまでに、この仮定法的な文化理念は強烈であったわけだ。すなわち、室町時代に全面に躍り出た足利将軍家や有力な大名は、『源氏物語』や源氏物語絵に魅惑されるに至った。その物語世界は、彼らにとつて、所有していかない、だが、絶望的なほどまでにそれが欲しい、高度な文化を表象していたからである。さらに、彼らがまみれていた軍事的な実存に對置されたものだからである。要すれば、かくして、平安時代とは、ことに『源氏物語』を媒体として、高度に女性化され、暇と洗練とエロティシズムの時代と見なされることとなった。この際、慶滋保胤や藤原明衡など男性知識人による書き物にうかがえる男性的な暴力的なあるいは民衆的な諸相は、捨象されている。なぜなら、そうした諸相は、室町時代において高度な文化とされた基準に対し、アンチテーゼ以外の何物でもないからである。後代の倒錯的な転倒は、『源氏物語』に秘められた仮定法的な強度を逆照している、との見方も可能であろう。

仮定法の一変形として、『枕草子』の実践を瞥見しておきたい。一〇世紀・一一世紀の仮名散文は、強いノスタルジア、あるいは、強いユートピア、この二傾向に特徴付けられる、と言えます。この両項は、既に喪失されたと感じたエロティシズムは、支配的な中枢の権力にとつても、文化の実践的な創出者にとつても、統合像と解放像とが拮抗する磁場を形成しているからです。実際のところ、エロティシズムは、紫式部や他の文学者が、微妙な彩りをつけながら、探求した物語要素でもある。愛欲、性的関係、情緒的な生活は、物語文学ジャンルが果敢に焦点をあてた問題であり、対するに、他分野のテクスト、とくに宗教テクストや政治テクストが積極的に採り上げることの少ない問題である。このようなジャンルの傾向性や選好性だけでも、文化論的な関心が刺激されます。

実践的な創作者の側に寄り添って言うなら、光源氏や在原業平のような物語の主人公は、そのエロスにかかわる侵犯ゆえに、処罰され、流離し、まさにその流離するところの地においてその罪が洗い清められている。結局、物語とは、禁止された欲望を解放し表出する、社会的に認定された手段である。むろん、これは一般論であり、暫定的な見方に過ぎない。

思うに、社会は、エロティシズムに對して、二重の構えで対応する。すなわち、一方で、社会は、統合を乱すものとして、エロティシズムを禁圧する。支配的な社会・政治機関は、通常、この方向に作動しがちである。他方で、社会は、社会存続の安定装置として、エロティシズムを操作する。支配体制は、エロティシズムを巧妙に統御する限りで、社会にわたる否定的な情動にはけ口を与えること

された何物かを創造すること、あるいは、必要だが未だ到来しない何物かを生産すること、このいずれかを意味します。いずれにしても、あるがままの実態とは異なる仮定条件を志向するという発想法において、ノスタルジアもユートピアも仮定法的な原理に深く根差しています。過去を再生産することによって、つかのまにせよ、人はそれに讃歌を捧げ、それに価値を与え、それを呼び戻すのです。こうした心性の回路は、『枕草子』で際立っています。周知のごとく、中関白家の栄耀と没落という残照の中で生み出された『枕草子』は、反映論的なテクストでありえない。そうではなくて、この草子は、喪失された理想を再生産したものである。関白道隆の死去、大納言伊周の配流、中宮定子の崩御。こうして没落する一連の悲劇に関して、『枕草子』は、翁丸章段での臚化表現を除いて、口をつぐみ、一方で、ただただ関白道隆や中宮定子が達成した中関白家の文化的な絶頂に筆を費やすのみである。かくして、『枕草子』は、日記的な章段と随想的な章段とを混交させた記述によって、時間的な歴史を故意に放棄し、喪失した過去というよりも無時間的な黄金の過去を生産しているのです。

3 逆説としてのエロティシズム

文化論にかかわる領域のひとつに、エロティシズムの問題があります。

ができる。

こうしたエロティシズムに関する二重基準は、江戸期のいわゆる好色文学が、有力な傍証になるでしょう。例えば、西鶴のテクストでは、どうだったか。当然のことながら、不義密通を犯した男女は、支配的な国法と儒教イデオロギーに反するものであり、死刑に処せられている。一方で、その不義密通を物語るテクストは、生のエネルギーを仮定法的に標記することによって、社会が隠蔽し禁圧する欲望に、暫定的なはけ口を与えている。

だが、エロティシズムの二重基準とは、見かけほど単純でありません。欲望は、解放されると同時に撃退される。物語の枠組は保守的であり、一方、物語の内容は高度にエロティックにしてかつ破壊性すらを潜在させている。エロティシズムの逆説が、ここでもまた、顕現している。こうした逆説と難題を、ローズマリー・ジャクソンは『ファンタジー破壊の文学』の中で、詳らかにしています。ファンタジー文学は、「文化的な抑圧に起因する欠如に対する代償である。それは、不在と欠如として経験されたものを追求する欲望の文学である」と。すなわち、ある種の文学は、支配的な文化によって引き起こされた犠牲に起因する被抑圧的な欲望を表出している。この種の文学は、欲望を表出する、と同時に、まさにその表出や叙述を通じて、欲望を撃退する。なぜなら、欲望は、叙述されることを通じて、露呈される、と同時に、充足されてしまうから。そう

した文化の過程は、作者にとっても読者にとっても、代償的に、二重の機能を同時に遂行する。

4 『源氏物語』をラカンが読めば

エロティシズムの迷路から脱出する、導きの糸を、ラカンの理論に見出すことができそうです。心的主体が「大文字の他者」の境位へと導かれる道筋を敷設した「現実界／想像界／象徴界」の理論が、それです。初源的な現実界はさておいて、心的な主体が、乳幼児の段階に相当する想像界から、成人の段階に相当する象徴界へと移行する、まさにその過程を取り扱った定式は、欲望の逃走線と袋小路を標記しています。

ラカンは、想像界から象徴界への通時的な移行を記述するに際して、成人における想像界と象徴界との共時的な併存を前提にしている、と付言しています。すなわち、心的主体は、子供がいつの日か自分も父親になるために母親を断念しなければならぬ領域、すなわち象徴界において、権威的な人物たち（大文字の他者）や犠牲・自己否定の必要性と苦戦しています。そのような時にも、同時に、心的主体にとって、なおかつ母親との一体感に関する欲望は、残留し続けているのです。想像界と象徴界とは、ともに、現実の世界と涉り合う上で、必要な領域です。

文学は、しばしば、想像界の機能を果たし、成人に幼児

の快楽を与えます。そうした文学は、暫定的な慰藉を供与することによって、心的主体が成人の世界からしばしば逃避することを許容します。一方、別の次元で、文学テクストは、心的主体が、象徴界における父・大文字の他者によって表象される権威と取引し、文化・社会に適合しその内部で自立するのに必要であるところの、「欲望の抑圧」「自己去勢」「欲望の延期」と取引することを補助します。象徴界そのものは、文化が個人に課すところのものであり、社会の統合的な部分として崇高さを教示します。以上、二重の指向軸をまとめるなら、文学は、想像界と象徴界との回路を、融通無碍に往還し続ける、と言えるでしょう。

『源氏物語』のばあい、ラカンの知見に照らすなら、どのような局面を呈するでしょうか。『源氏物語』は、想像界ないし（発生論的な時期が重なる）「鏡像段階」（ラカン）とともに開始します。その領域において、主人公は擬似的に母親と再結合するに至ります。というのも、実母・桐壺更衣との死別という原初の喪失は、代理的な母親である藤壺によって補償されるからです。息子は、義母と秘密の関係を確立するとき、内密な仕方、父親に取って替わることができず。禁止された方法によって、主人公は、性愛と母恋を短絡することができます。若き光源氏は、先蹤である『伊勢物語』の業平のように、まさに社会的な禁忌を侵すがゆえに、禁止された欲望の体現者、すなわち、物語の主人公となる。だが、その禁止された欲望に歯止め

がかからない、というわけではない。主人公は成人しなればならないし、ラカンが象徴界と命名したところの境域に移行しなければならぬ。そして、その象徴界では、自己否定、試練の期間、大文字の父なるものに対する服従が、要請されている。これら全てが、雷鳴による処罰と罪の祓いを含むところの、光源氏の自発的な須磨流離の間に、済まされている。

こうした想像界から象徴界への移行は、継子譚と貴種流離譚に形象化される、成人儀礼との平行過程を標記している。これらの物語定型において、主人公は、試練と自己否定の期間を通過し、精神的・社会的に子供から成人へと移行しています。基本的に、これらのモデルは、喪失と統合との物語様式です。したがって、文化は、社会行動のモデルを提示するだけでなく、可能性としてありうる脅威と危険への処方モデルをも提示しています。

ちなみに、若い男性貴族の流離という物語定型をなぞっておきましょう。継子譚の男性版ヴァージョンとも言えるこのモデルは、『源氏物語』第一部でとくに有効です。すなわち、弘徽殿は邪悪な継母であり、秩序が威嚇される、若い貴族男性は追放される、やがて逆境は克服される、そして主人公は報われる。こうした一連の過程において、主人公は一人前の成人となり指導者となる。したがって社会統合の指向軸になじむ社交様式が、試練克服の過程で習得される、との理路になっています。

第一部での象徴界への移行は、さらに、ターナーのモデルとも符合しています。主人公は、日常的な時空から跳び出し、仮定法的な境界領域（須磨）に移動し、そして、彼が帰還をなしとげたとき、社会的な秩序は再編成されることになるからです。権力は、弘徽殿・右大臣・その出自をひく朱雀院から、光源氏・藤壺・この両者の密事に来歴する皇子冷泉へと、委譲されている。この展開は、「海幸／山幸」神話において権力が兄から弟へと移管された理路と軌を一にしている。ただし、この変革は、既存の秩序を強化する作用に較べれば、重大なパラダイム・チェンジを表象するほどのものではありません。

第一部において、エロティシズムは、侵犯に帰着するものの、総じて肯定的・創造的な要因として作動している。生の原動力であるエロスは、主役を駆動して、その社会的な境位（宮廷）から脱出させ、通常なら接触する機会になかったはずの女性を探し求めさせる。そのエロスの力動は、結局のところ統御され、音楽・舞踏などさまざまな活動に昇華されていく。主人公はさまざまな侵犯に対して支払いをするべく造型され、また、独立心の強い女君によって拒絶されている。光源氏は、抑制しがたい暴力的な衝動をかかえつつ、自分もまた父親になるために自制し、象徴界へと移行するのです。

第二部において、しかしながら、その手の文化モデルは、破綻をきたしています。柏木に体现されるように、エ

ロスの情動はもはや統御を欠如して失速する。柏木にとって、若い貴族の流離譚モデルは失墜している。女三宮との密事という侵犯は、ただ屈辱と死に帰着するのみだ。秩序の回復はありえない。侵犯は、ただ廃墟へと至るだけ。だけれども転落的な事態に巻き込まれる。女三宮、源氏、柏木、おのがじしの生地獄に。

そうしたエロティシズムの自己破壊的な状況と、六条院に六条御息所の死霊が出現したことは、偶然の一致に拠るところでない。そして、最愛の紫上の死もまた、そうしたエロティシズムの文脈と無縁でない。第一部で構築された文化的な理想は、第二部にいたって、内部から崩壊を兆しつつあった。

第三部は、第一部や第二部と同様に、エロティクな衝動によって駆動されている。すなわち、最初は薫によって、次は匂宮によって。匂宮は、先行する人々に較べ、より好色な性格ですらある。だが、エロスの衝動は、相対化され、よりアイロニカルな色彩を帯び、かつて作動していたところの調整的な機能（想像界的／象徴界的）をもはや遂行しえなくなっている。中世的な禁欲主義が、第三部の霧のかたなに、たまゆら点綴しないわけでもない、とは言え、その全貌を理念として開示するまでには至らず、といった段階です。

5 脱構築する『源氏物語』

文化論的な観点から『源氏物語』を把握するばあい、三部の巨視的な相互関係を主軸としながら、仮定法の発想で吟味してみることが、効果的です。『源氏物語』が、自己解体する身振りを凝視しつつ、この物語の文化的な地歩や達成を見定めること。これまた、重要な課題でしょう。

『源氏物語』は、欲望の仮定法／仮定法の欲望を、実践的に提示しています。

文化の機能は、その参加成員に対し、日常生活全般の彩りのない現実を想起させることではありませんでした。そうではなくて、文化は、広義の宗教と同様に、ある種の「ナラティブ」（時系列において分節展開する物語性）を提示しています。そのナラティブは、共同体の成員が自己同化し追隨するものです。そのナラティブは、外部の脅威を処理し克服します。そのナラティブは、抑制された方法で、隠された欲望や願望に表現を与えます。

『源氏物語』第一部において、紫式部は、少なくとも二点、主要な理想を仮定法的に措定しています。第一は、政治的理想、第二は社会的理想です。第一の政治的理想は、政治的な現実を転倒させています。すなわち、藤原摂関体制の闇に裏付けられた幼童の天皇たちでなく、対するに、自ら直接に支配し、非・藤原氏の出自である王統の女

性（藤壺）と結婚し、自己の権力を非・藤原氏の女性との間でもうけた子供（東宮冷泉）に移管準備する、成人の天皇を創出しているからです。

第二に、第一と同様に、社会的な現実に背反する形で、社会的な理想を提示しています。すなわち、女性の社会的な地位に関して、紫上に具現されたものが、その社会的な理想の一例です。紫上、この女性は、周知のとおり、強力な後見がないまま最上層の男性と結婚し、子供を生むことなくして主要な妻の座にまで上昇しました。後見があること、子供を生むこと、これが正統な妻の要件として期待されていた時代の原則にもかかわらず、です。

社会的な理想に関する他の例証として、六条院を挙げることができます。少女巻で造営を物語られる六条院は、物語の第一部における絶頂の一つを標記していますが、これもまた、現実に背反するという意味において、空想的な理想に他ならない。『源氏物語』成立の同時代は、結婚制度の歴史において過渡期であるとは言え、なおかつ妻問婚と多妻制が基調であった、と言って大過ない。にもかかわらず、六条院では、複数の妻妾が共存しながら同一の場所であらんと生活する。このような多妻制の配列は、紫式部の同時代における社会通念による限り、夢想だにされなかったことではないか。要するに、この物語は、ある種の社会的・心理学的な欲求・欲望を充足している。現実社会では達成できるはずのない、とくに主たる読者層である女性（受領

階級) たちの抱いたであろう、欲求・欲望を、である。第一部の仮定法的な機制を例示してみましよう。もし、醍醐天皇の聖代に回帰するとしたら、どのようにして、喪われた文化の夢を遂行することができるのだろうか? もし、そのような時代に、色好みの男君が、喪われた母親を回復しようと求めるなら、どのようになるのか? もし、そのような男君が一人の女君だけでは決して満足できないばあい、何が出来るのか? もし、そのようなばあい、女君はどのような世界の見通しをたてることができるだろうか? 『源氏物語』第一部には、そのように、さまざまに「もし」という仮定法的な発想とその帰結とが、瀾漫して

います。なるほど、第一部は仮定法的な想像力を駆使して、それなりの理想を措定した。だが、こうした理想が、紫式部なしい『源氏物語』の究極の理想である、と断言するとしたら、それは大きな誤解でしょう。理想だけを静止的に把握し喧伝する読解は、この物語が延展し生成する力動を見損なっている。『源氏物語』は、第一部で終了することなく、第二部・第三部まで差延を孕みつつ、継起しているわけです。全三部の展開による、脱構築の軌跡、『源氏物語』の脱構築、脱構築する『源氏物語』。これこそ、なによりも枢要な『源氏物語』観である。ともあれ、『源氏物語』第二部・第三部は、第一部であれほど巧みに創造した初期の理想像を、完膚無きまで脱構築してしまうのです。そうい

て、秩序と意味とを提示することができるのだろうか? 仮定法的な条件節は、連辞的な展開に向けて、多様にしてかつ思索的な撰択肢を、挑発的に呼び起こすべく作動するのです。

このような仮定法的な想像力を喚起する『源氏物語』は、古代から中世へといたる文化史の流れの中で、どのように定位することができるでしょうか。文化史の歴史的な座標軸をセット・アップしてみましよう。『源氏物語』第一部は、天皇や宮廷に焦点をあてた、初動的な文化規範を提示してみせました。そこで構築した理想世界は、既に考察したように、後代において総体としての平安文化を実際のところ体現するものとなった、それほどまでに強烈な水準を画しています。しかしながら、『源氏物語』第三部は、そのような規範性を掘り崩し、それがもはや実態的なものでないことを露曝し、源信(九四二―一〇一七年)の『往生要集』、慶滋保胤の『池亭記』、藤原明衡の『新猿蓑記』に見いだせるごとき、混沌とした世界を示唆しています。宗教と同じく、文化は二重の機能を果たします。すなわち、第一に、世界とはどのようなものであるか、をわれわれに語ることに。第二に、その世界の中でどのように行動するか、をわれわれに語ることに。以上の二点です。

さて、『源氏物語』第一部は、宮廷文化、一夫多妻婚、社交様式の粹美、美的趣向、皇室の権威などなどの諸価値を、構築しました。だが、最終第三部では、第一部が中核

つた理想は、精査してみるならば、文化的構築や信念・臆測の束が拠って立つところの、前提や基礎が実は疑わしく不安定であること。これが、第二部・第三部によって、闡明されるのです。

『源氏物語』の第一部が、理想的な過去を懐旧するノスタルジックなものである、とするなら、対するに、その第三部は未来に向けて投企されている、と言えます。第三部は、一連の深遠なる懐疑の領域を切り開いています。仮定法は、次のように、条件節と帰結節を組み合わせています。条件節の前提として、貴族的な一夫多妻婚システムによって位置づけられている境位が実はあてにならないものである、という覚醒がある。そこで、「もし」と仮定するわけです。もし、男女のヘテロ・セクシュアルな結婚と家族が社会に対しても個人に対しても基礎を賦与しているところの、支配的な文化の前提を放棄する「とするならば」と条件節を立てるのです。もしそうであるとするならば、次に、主節の帰結節が続きます。「そうだとするならば」「それなら、いつたい他の撰択肢とは何か、と。女性は今ここから何処へ行くのか? 男なき女だけの世界は存在しているのか?」どのようにして、そのような世界で、人は生き延びることができるだろうか? 同様に、仮定法的な発想に続く、重要な発問があります。信念による救済や無我という文化的な撰択肢の範疇があるとして、それは不条理な宇宙において、喪失と苦悩と不正と死の世界におい

的な根拠とするところの諸価値が、ほとんど完膚無きまでに褪色してしまつたことを示し、あわせて、そうした新世界がどのようなものであるか、これをもし示しています。だが、そのような新世界で、いかに行動すべきか。その点に關して、第三部は、仮説的な撰択肢や問題提起をとりわけ積極的に開拓するのですが、撰択肢の多様さゆえにということもあって、一義的な解答に絞り込むような形での解決策を明示していません。ここにおいて、第一部のエロティシズムは大幅に退縮しているが、中世において見出された、新しい文化的な理念としての禁欲主義(情欲からの隔離)はいまだ定式化されるに至っていません。後代になつて、中世のテクストは、貴族社会の欠点と価値とを前提にしながら、新世界の眺望とともに、その世界における生活の行動様式をも、ふたつながら提示しています。だが、混沌のただなかでの救済や慰藉を提示するはずの、行動モデルを、『源氏物語』の結末部は、いまだ提起していません。そうではなくて、大君・薫・浮舟などの登場人物は、複数の文化の中間に、複数の相克する価値体系の中間に、要するに、天皇中心の宮廷貴族文化と中世的な無我との中間に、捕われているだけです。宇治十帖の人々は、前方を見渡し、同時に、後方を見返るのです。

6 統合と変革とのほざき

文化批評という所期の問題に戻り、文学の社会歴史的な役割を理解するためには、乗り超えるべき二つの問題点があります。その一つは、狭義に限定されたテキストならびにインターテキストユアリティの問題です。すなわち、文学を他の文学テキストとの連関だけで眺める姿勢です。他の一つは、文学という価値概念そのもの。すなわち、近代主義的な、多くは西欧の概念に由来する、文学通念です。なかんずく、文学は世界の鏡である、という模写論的な憶断です。また、文学はすべての事実を反映するわけではないので、一種の貧弱な歴史である、という模写論的な臆断です。むろん、テキストユアリティもミメシスも依然として無視しがたい重要な側面だが、一方で、文学テキストは、他の文化資料と同様に、文化のより大きな枠組のなかで、理解する必要がある。しかも、静止的な「伝統」としてでなく、不断に変化し、相互に交渉するサブ・カルチャーの動態（これは行動とその反応の規範を提示する）としてである。文学テキストは、象徴的な指標を通じて価値を創造するナラティブとして、文化の統合においても文化の変革においても、あるいは、いかに社会と共同体が自己を知覚し構築するか、その方法においても、重要な役割を果たすものである。

文学テキストが、しばしば「虚構」であり、現実的に決

III 質疑応答篇

「ラカンをめぐる」

*ケリム・ヤサル 理論の適用に関して、仮定法として集約された人類学・社会学の応用は、たいへん説得的であり、実り豊かな領野がこれからも期待できる、との印象を受けました。ただし、ラカンを使った箇所には、抵抗感が残りました。その箇所は、諸理論を併用した合成の統びになっていて、との感じでした。しかも、ラカンのばあい、理論体系の表層的な図式だけで済ませてよいものか、疑問があります。

*サトコ・シマザキ（嶋崎聡子） ラカンを参照することについては、抵抗を感じません。私のばあい、江戸期の幽霊を研究しているので、無意識領域を探索したラカン理論は、有力な拠点の一つだからです。また、ラカンと雁行する形で使われた、成人儀礼およびターナーの仮定法に拠りながら、須磨・明石の物語に、試験の克服と自己否定の期間を読むことに、異論はありません。でも、そこでラカンの象徴界が定立しているかどうか、疑問です。なぜな

して存在したことがなかった話や登場人物を構築する、という事実は、その価値を減ずるものでない。むしろ、重要なことは、文学テキストが想像的であるという本性にある。なぜなら、そこにこそ、最も深い文化の諸価値がまさしく体现されているからだ。こうした意味において、これらの文学テキストは、特殊個別的な社会に関して、その個別特殊な共同体の欲求や恐怖あるいは志望に関して、より雄弁に物語ることが、往々にしてありえる。これに較べれば、個別特殊な時間に個別特殊な場所でこれこれしかじかの人数の人々がなどといった、そのような事実は、文化が価値を賦与しない限り、何らの固有な価値がない、微々たる存在に過ぎない。これらの文学テキストは、精神分析学的な術語で言うなら、「社会の無意識」(social unconsciousness)を露曝するのだ。

紫式部の達成に関して心底から驚嘆すべき事柄は、個別特殊文化を体现するようになるほどまでに強烈な物語性を創造したこと、いな、そのみならず、しかも同時に、それ自体を脱構築する物語性をも創造した、他ならぬその努力にある。平安京の均整美と洗練は、じつに、現実的な混沌と衰頹とのただなかにおける社会的な構築であり、文化的な結果に他ならない。

ら、光源氏を無条件で恕す故桐壺院のありかたは、社会の掟を体现する象徴界ないし父なるものと必ずしも整合しないからです。むしろ、須磨・明石における父なるものの欠如ないし不全こそ、それ以降の展開、とくに第二部の悲劇に繋がっていく原因ではないか。第二部で女三宮を光源氏が引き受ける理由は、女三宮が藤壺の血縁だからでしょう。ということで、光源氏も物語も、母なるものを依然として引きずっている、と読めるわけです。そうした退行的な欲求が持続する限りで、須磨・明石以降の物語も、想像界が基調ではないか、との私見です。

*シラネ 『源氏物語』第一部・第三部でラカンの象徴界モデルは破綻する、という見取図を実践篇で提示しました。全三部が脱構築的な展開になっているのだから、第一部の須磨・明石で定立された象徴界が暫定的な仮構に過ぎないことは、第二部以降から溯れば自明な事柄です。それにしても、象徴界と想像界とは共時的に併存する、とラカン本人が付言しているくらいだから、分節化したいやや理念型であり、実践形態としては混在しているわけです。白黒を争う問題でもないのに、あなた自身の読みを展開してください。

*小林 想像界から象徴界へ移行するに際して、対象α（想像界の欲望の残滓）が残留する、とラカンは説明していますね。この対象αの幻影に操られながら、心的主体の欲動は、大文字の他者の境位である象徴界において、循環

するのだ、と。

「エロティシズム、フェミニニティ」

小林 記述することが解放と同時に撃退になるという逆説なら、『源氏物語』のエロティシズムは、社会・文化の変革とどのような関係に立つのか。結局のところ、見通しとして、できるなら、混沌や社会の無意識ともからめて、ご説明ねがいたいのですが。

シラネ エロティシズムが物語の駆動力であることは、実践篇で述べてきたところですが、そうしたエロティシズムの文脈じたい変革の方向でどう作用しうるか、ということですね。少なくとも、二点ばかり、変革を兆しているということは指摘できそうです。すなわち、第一点は、社会の無意識領域にかかわる欲望、とくに女性の欲望に言説的な形態を与えたということです。帯木巻の雨夜の品定め、および、この言説圏の物語は、とくに重要です。新しい社会階層、具体的には受領階級という中流ないし下流の貴族階層の女性たちに焦点を与えることによって、彼女たちの欲望やその挫折を分節化し提示しえた、ということですね。品定めという男たちの言説が、帯木三帖で実際の物語展開をなす、空蟬・夕顔という女たちの具体的な物語に移っていく。物語の力点が、男の欲望による理論篇から、女の欲望に関する実践篇へと、移動している。帯木三帖に限ら

クリステイナ かもしれない。とにかく、貴族社会の文化や文学へアクセスすることじたい、権力への接近にも繋がる、と同時に、身体性を収奪されることにも繋がっているでしょ。でも、別の見方をするならば、女性は、そうした両義的な位相を逆手にとっている節もうかがわれます。和歌の詠出は、社会進出を遂行する手段になっているし、また、物語での消息や和歌が結婚生活での駆け引きに使われています。『蜻蛉日記』など、その典型。文学に習熟することが、閉鎖されがちな社会システムのなかで、開放的なウィンドーになっている。これって、やはり、エロティシズムやフェミニニティの問題かと思われまます。

マイケル・エメリック 六条院が、仮定法的な時空である、という説明は了解できますが、理想性の体現という見方・価値観には賛同できません。円地文字なども示唆しているところですが、六条院とは、精妙にしかつ畏怖すべき嗜虐の館ではないか。エロティシズムの歪み、歪んだエロティシズムが、蔓延していますね。

ジャック・ストーンマン 『源氏物語』や光源氏の女性性という価値観、とくに、武士階級によって具現化され

ず、他の眷々も含めて、『源氏物語』が、社会のより広範な女性たちの欲望を開発し、その地図を描出したということは、一夫多妻制のもとにおける女性たちに関して、ある種の逃走線と変革の可能性を示唆したと評価できるわけです。

第二に、エロティシズムとの関係において、身体性を発見した、ということですね。女性が、社会政治的な環境のもとで、その身体をどのように管理するか、その撰択肢を記述してみせたからです。身体性を媒介にして、藤壺や明石君のように権力の中枢に食い込む方向もある。大君のように、拒食という形で、身体の自己否定的な管理によって中世の禁欲的な理念に接近する方向もある。あるいは、浮舟の身体のように、鬼や悪霊が徘徊する『今昔物語集』的な世界に下降することで、来るべき中世的な世界を予感する方向もあります。

要するに、エロティシズムに関しては、社会統合の指向軸よりも、社会変革の指向軸の方が、優勢である、と総括できるのではないのでしょうか。

クリステイナ・ラフィン 女性の欲望を「開発」する、という言い方は、ちょっと。ファルス中心主義的な言説では。でも、平安時代の女性実作者は、その点で、微妙ですね。女を売りにしている、というか。あら。だって。
*サトル・サイトウ（斉藤悟） ウーマン・アズ・ライターという問題。

た男性性との比較でのそれ。こういう二項対立的な図式に対しては、異論があります。近世の国学が「益荒男振（ますらをぶり）／手弱女振（たをやめぶり）」と分節化する以前に、そのような二元論が『源氏物語』の読みにあつたでしょうか。『源氏物語』のセクシュアリティやエロティシズムを論及するばあい、『源氏物語』の女性性という通念を自明視しない、慎重な構えが必要だ、との私見です。



ハルオ・シラネ・ゼミ (2001年9月)

「期待の地平を転倒させれば」

*アキコ・タケウチ（竹内晶子） 中世の能のばあい、とくに修羅物のばあい、『平家物語』の武將が『源氏物語』とフュージョンした形で造型される傾向が認められます。ジャンルの転換によって、『源氏物語』の仮定法的な起爆力が際立ってくる。これって、何なのでしょいか。実践篇でも、室町の足利將軍家が、『源氏物語』の幻想に魅惑された、という転倒的な受容に関する指摘がありました。後代それぞれの権力が、自己権力を正統化すべく『源氏物語』を回収する、という文化政策に関しては、このごろよく言及されています。享受史を点検することによって、『源氏物語』に秘められた仮定法的な機能が、拡大された形で、見えてくるのではないでしょいか。

*北村結花 私も同感です。『源氏物語』は、開かれたテキストですね。実際のところ近現代の『源氏物語』バージョンを調査してみると、夢浮橋巻の結末以降の新作物語がほとんど増殖する傾向に、直面します。中世ですでに後日譚を語る『山路の露』が作られたでしょ。薫と匂宮との人気較べでも、ここ二〇年くらいの時期は、匂宮派が圧倒的多数。それ以前には、匂宮でなく薫の方が、理想とされてきました。時代の好み、とくにポピュラー・カルチャー的な流行が、たやすく反映される、というか、そういった

動向・趣向を吸収してしまう、開かれたテキスト『源氏物語』の凄さでしょいか。

*サトル 変化の機能にかかわる通時的な軸の方が生産的かな、と評価できます。後代の受容によって、『源氏物語』の可能性が析出してくる、ということですね。共時的な軸に沿って、『源氏物語』への接近を試みても、同時代ないし先行する時代に流通していたはずのおびただしい物語群が散佚しているの、物語群の競合するヘゲモニー的な言説空間が参照しづらい。

*アキコ 後代の受容機能と同時代の実践機能と、これって、二重基準なんですよ。

*マシュー・トンブソン 各時代と『源氏物語』との対話によって、相互反動的に、意味が生産されるのではないかと、期待できます。まあ、やや一般論ですが。

「権力と文学テキスト」

*ヨシア・クワン（権英雅） 足利將軍家と『源氏物語』との関係、実践篇でもアキコの発言でも、吟味すべきポイントだと感じました。権力と文化テキストとが相互嵌入する累積層を、汎西洋化された現代の読者がどう扱うか、そこに関心があります。たしかに、歴代の支配権力は『源氏物語』の収奪を文化政策として試みた、かもしれない。でも、支配権力だけが『源氏物語』を独占できるわけはな

い。文化テキストを、支配権力との関与性において、二項対立の下位項に固定する、そういった従属的な発想には反対です。むしろ、文化テキストという美的領域を梃子にして、文化表象が発揮した知や権力、あるいは、古代文化における仮定法的な可能性など、そういった問題系を追求したい。要するに、権力や体制を脱構築する可能性を、美的テキストに予感します。

*小林 支配権力が文化政策としてつねに『源氏物語』を回収されたわけでない。これを強調しておきたいです。実際、昭和戦時下の支配権力は、『源氏物語』に思想統制的な弾圧を執行しています。『源氏物語』劇上演弾圧や谷崎源氏の検閲などが、その例証です。『大日本帝国憲法』冒頭部の万世一系幻想が戦時体制において過剰に情宣化される時、反作用として、皇統譜の汚染や篡奪を主系列に据える『源氏物語』は、「大不敬」の言説を際立てる。実際、言論弾圧は、文化政策の破綻以外の何物でもない。平安時代における支配権力と文学テキストとのズレが、強度な振幅をもって拡大再生産された、とも言えるでしょう。

柳亭種彦の『修紫田舎源氏』が、別の例です。このパロディ版は、足利將軍家を偽装した翻案であるにもかかわらず、徳川將軍家の大奥を揶揄する戯作として、絶版を命じられました。『源氏物語』は、占有を試みる支配権力や天皇制への倒錯的な自己同化をつねに挫く、潜在的な暴力を秘めています。

*スコット・ラインバガー シラネ教授の「カノン」研究でもあきらかにになってきた領域ですが、「カノン」とは支配的な権力が創出した産物に他ならない。でも、支配階級ならざる大衆社会の一般階層も、ヘゲモニー形成の実践において、上部構造と下部構造との媒介的な領域に参加できるのではないでしょいか。

*シラネ 支配的な権力がコントロールできない、文化の領域がある。江戸時代の『修紫田舎源氏』の事例など、有力な事例でしょ。俗文学、ポピュラー・カルチャーが、古典文化である『源氏物語』を吸収して再生産していく。そのような実践こそ、硬直したカノンに鑄造される恐れのある『源氏物語』テキストを活性化し、流動化するという効果がある。それだけでなく、筆禍という代償と引き換えにはあったが、文化弾圧による支配権力じたいを、相対化することになる。さらに、やや長期的な展望において、文化じたいを変革する流路に繋がっていくのです。

「人麻呂長歌の位相」

*トークイル・ダシー 支配権力と文学テキストとのズレに関して、古代文学はいかがでしょいか。平安文学のばあい、権力統合から遠心的に乖離している、との説明でしたが。古代文学に関して、もっと具体的に例示してください。

*シラネ 日本古代は、概評するなら、デュルケム的な統

合象がまさった文化でしょう。遠心化よりも求心化が有力です。人麻呂の「近江荒都歌」「吉野讃歌」などが典型的。でも、統合作用といっても、反面で、そこに闘争やイデオロギー的な力動の痕跡が認められないというわけでない。これらの長歌には、壬申の乱の濃厚な痕跡が認められます。壬申の乱は、大規模な二大勢力の対立を伴った、皇統そのものの分裂であった。このような衝突や混沌の後には、政治的・軍事的な勝利者たるや、必ず秩序の回復を試みなければならぬ。強権だけで組織化した秩序なら、長期延命は困難である。秩序回復の過程において、重要な役割を果たすもの、それが他ならぬ文化である。知謀的な指導者である天武天皇や伴侶の持統天皇は、この鉄則を知悉していた。新規な政治秩序、換言するなら、新規な皇統譜を創出し、これを強化すること、これが重要な課題でした。

*トクイル なるほど、そこで、折しも、人麻呂の登場です。人麻呂は、天武天皇・持統女帝ならびにその骨肉のために詩歌の創作を要請された宮廷歌人である、と。

*シラネ そう。したがって、人麻呂は、少なくとも、二つの事柄を遂行しなければならなかった。端的にいうなら、死霊の鎮撫と勝者の正統化、この二つです。その限りにおいて、宮廷歌人としての人麻呂は、権力の立場に同化した、言説の代行者です。

「近江荒都歌」では、近江朝廷側の文化的な価値を追認

「歴史の再編、あるいはアジア的擬制」

*ハーシャル・ミラー 天武・持統による歴史の再編が、なぜ鎮魂の論理や美化作用に則り、遂行されたのか。その理由や事情を、どう考えたらよいのでしょうか。

*シラネ 歴史の再編成において、過去は常に書き換えられる。海幸・山幸の神話で例証しましょうか。隼人クランは、その神話で敗者となった海幸の後裔として、位置付けられている。伝統的に宮廷の衛士を分掌とする隼人クランの起源が、「海幸／山幸」という関与的な兄弟の血縁によって、大和クランと結合する。こうした神話的な擬制は、隼人クランの服属儀礼と軍事的榮譽とを、同時に標記しているでしょう。

東アジアの文化伝統において、変革や革命が過去の正統性や復古の大義によって遂行される点で、過去のもつ意義はとりわけ重要です。個人や家系の自己同一性が、系図や祖先崇拜と結び付いている、という点でもですね。歴史叙述という過去の生産は、宗教的な信念にも劣らない文化要素です。また、鎮魂という発想は、支配階層が相互に婚戚関係で結び付いている、しかも島国である、日本にとつて、実質的な政治的論理になっています。島国の内部で、敗北者を徹底的に殲滅し、そのうえさらに苛酷な筆誅を加える、ということは秩序回復の論理になじまなかったのだ

し、さ迷える死霊を宥める形で、敗者を鎮撫している。壬申の乱で破壊された近江の都を造営した者たちが、いかに傑出していたか、これを爾々嫻々と歌い上げている。戦乱の暴力を捨象しつつ、鎮魂の機制に拠って、歴史の再編成が企てられているわけですね。しかも、美化作用を通じて。

*ヨンア 文化政策の美化作用を遂行したという点で、宮廷歌人・人麻呂のばあい、宮廷女房・紫式部と、ずいぶん懸け離れている、との感じですか。両者とも、権力中枢の近傍に所属していたという限りで、その物理的な距離がほとんど等価であったにもかかわらず、心的な距離は対照的なほどの差異を示している、といった印象です。

*シラネ いい着眼です。「吉野讃歌」は、女帝持統を神格の次元にまで押し上げる形で、勝利者の絶対的な神聖さを頌め称えていく。なにしろ、大地や自然を表象したところの山や川の神々まで「依りて仕ふる」母なる女神の水準にまで、女帝持統を嵩上げしているのですから。こうした神聖化の過程は、より先行する古代における豊饒儀礼や自然の神格信仰が、単一の個人や家系への崇拜へと転換する変容過程である、と読めるでしょう。自然の宗教化、宗教化された自然、渾然とした自然と宗教との合一感を表出すること、これが「吉野讃歌」の効果の一つです。人麻呂のばあい、自然とは、美そのものの衣をまとった、支配権力の究竟な喩として顕現しています。

しょうか。

*ハーシャル 私の臆断によれば、支配権力が、経済的社会的な損益を熟知していたからだ、と思われまします。敵対するクランの族長や支配層を抹殺すると、被征服クランからの収奪機能が著しく低減するでしょう。あまり、実証的な根拠はないのですが。とにかく、今回の文化論・言説論は、下部構造との繋がりにやや弱点がある、といった印象です。

*シラネ ありがとうございます。基本方針としては、統合した歴史叙述の背後に、複数性や軋轢を探知したい、ということですね。宮廷歌人による鎮魂や讃歌は、隠蔽した領域が透視しやすいかな、との見当だったのですが、もう少し考えてみましょう。

「理論の功罪、コロニアリズム・シンドローム」

*マイケル 理論化とは難問だな、と痛感しています。難しさは、個別理論じたいが難解であるという点においてでなく、個別理論を駆使することが、どこまで対象に適合するのだろうか、という点においてです。今回の理論篇・実践篇に限っても、ターナー、ギアーツ、フーコー、アルチュセール、グラムシ、ニュー・ヒストリシズム、ラカンなどなど、多くの固有名詞が引き合いに出されています。始めにケリムが指摘したことにも繋がりますが、固有名詞の

次に、『夢の浮橋』を上梓したところから、関心が和歌、俳諧、俳句という韻文に移っていききました。とくに連歌や俳諧にひかれたのも、いま述べたところと同様のダイナミズムゆえでした。これら文学形態においても、新しい言葉が先行する言葉に次々と連鎖しながら、絶えず前進し、しかも、方向が見定まらない。この特質は、統一や構造の原則を保つ、西欧の詩学とまったく異質な対立をなしている。もちろん、連歌や俳諧にも、それなりに規則はありますが、基調的な理念としては、不断の動きと可能性を求め続けなければならない。そういった詩的ダイナミズムは、連歌や連句に参加する小人数な人々の集まりという創作形態と密接に結び付いている。戦乱の混沌や死の蔭に晒されながら、生の証しであるかのごとく、人々はしきりに連歌を付け合わせ続けた。さらに、近世において、当時の世界と過去の世界を交ぜながら、人々は歌仙を巻き連句に打ち興じていた。こうした文化参加の現象は、社会構造と文化形態との連関性を探求する方向に、私を導きました。

連歌・俳諧の研究に従事する一方で、カンノン形成の問題にも取り組んできました。文化・文学の生産が、権力・権威と、いかなる関係になっているか、とくに国民国家の形成といかなる関係になっているか、という問題です。従来、政治権力と無縁な芸術である、と見なされてきた広範なテクニクの価値や位相が、実は、さまざまな言説の競合によって、あるいは、変成しつづける社会的な背景

『源氏物語から新・文化論へ』

来歴を捨象して、異種混合的に応用することは、一種の錬金術ではないだろうか。しかも、今回の論で援用された固有名詞は、欧米の研究者や学説ばかりでした。『源氏物語』なり、『万葉集』なり、近代以前の東アジアのテクニクを扱うにもかかわらず、です。これでは、一種の文化的植民地主義になつていないだろうか。そもそも「文化」「文明」という要語じたい、ヨーロッパ中心主義的・植民地主義的な発想を残留させていないだろうか。

* ヨンア たしかに、西洋理論を近代以前の東アジアの文化に試用することは、困難を伴わないわけでもありません。反面で、東アジア各地の前近代文化が一枚岩的に硬直している、との通念を流動化していく上で、効果的な作用が期待できます。現代人のばあい、よかれあしかれ、事実として汎西洋化された発想や思考方法が共通の基盤になっていますから。

* ハーシャル 同感です。無下に理論の援用を退けることもない。既存の理論が応用できないとき、理論の限界もわかるし、また、対象の特異性にも気が付くでしょう。

* シラネ 理論適用の諸問題点に関して、みなさんの指摘は、それぞれ基本的に正しい。たしかに、現在構想中の文化論・言説論は、主として西洋理論に立脚している。だが、とりあえず、試みてみることに。そうした試論なくして、事柄が自然発生するということは、ありえませんか。

* 小林 最後に大切なことを一点。ハルオ・シラネとして、なぜ文化論・言説論なのか、その点を、自己展望着的に語っていただけるでしょうか。

* シラネ はい。まず、『源氏物語』から研究を始めたわけですね。初めて『源氏物語』に接したとき、この物語の自己再生的なナラティブに驚きました。アリストテレス的な、「始・中・終」という統一性の原理がなく、次々に延長していくこの物語の叙法にですね。しかも、単に次々と延長するというのではなく、先行する巻や箇所ですべて物語に行きつ戻りつしながら、ときにはそれらを批判し反転させていく。そうした物語性は、あたかも『源氏物語』じたいの文章に、すなわち、どこまでも途切れることなく、微妙な意味合いを漂わせる接続語を駆使しながら、主語と述語を次々に増殖させて、連綿と繰り出して行く、『源氏物語』じたいの文章に、酷似すらしているかのようである、との印象に圧倒されました。この物語の骨法は、強度な自己反照が効いた、ある種のメタ物語、メタ批評であり、さながら平安物語にしばしば言及されるカルマ的な再生・輪廻転生のようなのではないかと。あえて言うならば、これを、なんとか理論的に把握したい、という動機が、『夢の浮橋』―『源氏物語』の詩学』の論述に底流しています。

によって、不断に構築され連綿と再編されているのだ、というところ。「日本古典文学」とは、継続的に再生産される流動体である、ということ。こうしたカンノン形成の問題は、過去が間断なく再生産されるという歴史叙述の問題と酷似しています。

現時点としては、文化が統合と変革との双方向に機能している、という文化現象の解析を模索しているところですね。文化は、一方で既存の政治社会的な編制や階層を強化すべく、また一方で相克を解決しながら変革の可能性を求め、また一方に機能している。これをどう見定めるべきか。対象を日本に焦点化しながら、新たな文化論を求めつつ、といった段階でしょうか。そして、文化やテクニクが、いかに仮定法的な機能を発揮しうるか。これらの諸問題に関しては、ここまでゼミで、理論的かつ実践的に、展開してきたところです。

* 小林 ありがとうございます。闘論はますます「増殖」し、「連綿と繰り出して行く」勢いですが、以上に、いわゆる中締めということ、よろしいでしょうか。

* シラネ みなさん、ご苦労さまでした。ありがとうございます。

ハルオ・シラネ(コロンビア大学教授)

こばやし・まさあき(青山学院女子短期大学教授)

日本語・日本文学・日本文化

國文學

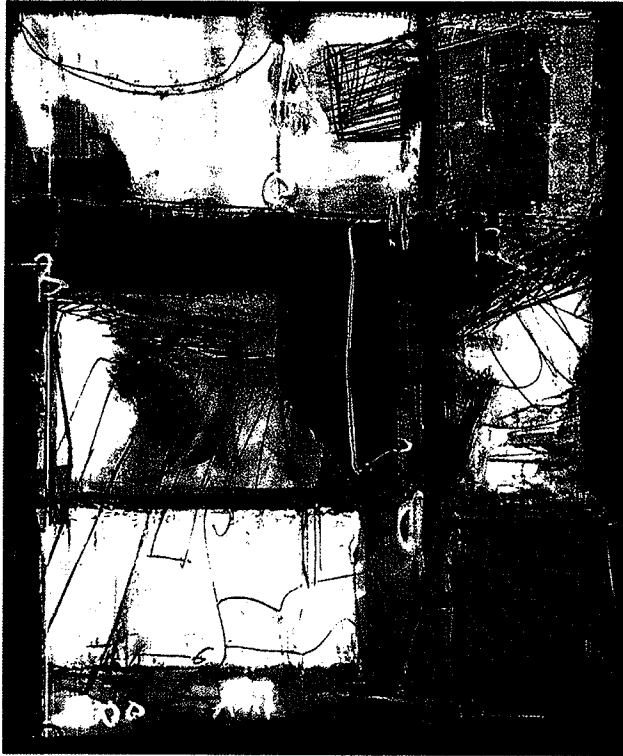
解釈と教材の研究

昭和31年9月25日 第3種郵便物認可 平成13年12月10日発行(毎月1回10日発行) 第46巻第14号12月号

王朝文学—韻文と散文の交通

《コロンビア大学 オープン・ゼミ》

仮定法としての『源氏物語』 ハルオ・シラネ



王の導師—「とはすがたり」における唱導のことは／栄華物語と絵画
—駒競行幸絵巻への多角的アプローチ／「こひぢにまどふころ」—散文と韻文の
共通の詩学をめざして／『源氏物語』の政治性—漢詩文の引用から見た／
国文学と歴史学とをむすぶもの／〈王朝文学—韻文と散文の交通〉の文献

増補を行く
〈日記〉といふエクリチュール／源氏物語「山里」の風景／物語表裏の政治学／
室町期の源氏物語本文—三条西家本と正徹本と／松浦宮物語巻一の和歌をめぐる
—本歌取りと擬古／仮名文をもたらししたもの／合わせの美学—漢と和の交響

2001年 **12**月号 第46巻14号
學燈社